
君に桜餅をあげる

こぬか雨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君に桜餅をあげる

【Nコード】

N4944BA

【作者名】

こぬか雨

【あらすじ】

孤児が狐の化身に助けられながら成長していく話。

お寺を守る狐に支えられながら、高校生の那奈は食堂を営む毎日。でも放課後しかやっていないこともあって食堂にはお客さんが来なくて、那奈は落ち込みっぱなし。

それを元氣付けようと必死な狐やクラスメート達のほのぼのストーリー！。

プロローグ 「今日と明日の境目で」 (前書き)

登場人物は女の子が多いので予めご了承ください。
残酷なシーン等はありません。

どちらかというとほのぼの系を目指しております。

プロローグ 「今日と明日の境目で」

水滴が一粒、額に落ちてきた。一瞬で弾けたそれを手で拭って、女の子は呟く。

「雨か……」

それはなんてことない平凡な言葉なのに、何故か特別な色を帯びて辺りに響いた。

次第に雨音が大きくなって、彼女の髪を手を足を濡らしていくのに、彼女はじつと空を見上げている。ジャングルジムのてっぺんで足を揺らしながら何をするでもなく。ただひたすらに空を見上げている。彼女の頭上、遙か彼方から落ちてくる大量の雨粒が、彼女のいる小さな公園に八つ目の水溜まりを作った頃、彼女は不意に空を見上げるのをやめた。

「今日も来たの？」

真っ直ぐ見つめるその先には、赤い傘を持った一人の女の子。着物の姿のその子はジャングルジムの彼女よりずっと年下のように、おかっぱ頭を縦に振った。

「濡れるよ」

その子は公園の中に入るでもなく、かと言って離れた場所にいるわけでもなく、道路と入口の境目辺りに立ったまま言った。

あはは、と喝いた笑いを漏らして女の子がジャングルジムから飛び降りた。

「もうとつくにびしょ濡れだよ」

彼女はそのまま女の子の方に歩いてきて、それを待っていたかのようにな女の子は歩き出す。

「怒ってる？」

しばらく前後になって歩いていると、年上の方の女の子が躊躇いが

ちに聞いた。

「別に」

素っ気ない返事に内心苦笑しながら女の子は確認してみる。

「そう？」

「そう」

「そっか」

「うん」

その後は大した会話もなく、夜の街を二人の女の子はてくてく歩いていった。着物の裾を邪魔くさそうに蹴りながら歩く女の子は傘の下から後ろの女の子を何度も振り返るけれど、当の本人は止みかけた雨とにらめっこをしていて全然こっちを見てくれない。ふて腐れて歩調を速めた女の子の足がアスファルトを鳴らす。

これは、土曜日から日曜日に変わる頃のこと。

第一話 「狐寺」

「とりあえず着替えないと」

あちこちがたの来ていそうなお寺の前まで来ると、着物の女の子は言った。

「そだね」

言われた女の子は今はずっかり止んだ雨のせいで体に張り付いているシャツをつまむ。体にぴっちり張り付いているから、女の子のブローションの良さがよく分かってしまう。おまけに中が透けていて、よく平然と街中を歩けたな、と感心してしまうような格好だ。二人はそのままお寺の中に入って、というよりもお寺の中を抜けて裏にあるおんぼろな小屋の中に入って、囲炉裏に火を焚いた。

「しかし電気もないなんて見捨てられたにしても酷すぎるよね」

「文句があるなら帰っていいよ」

「嘘です、嘘です、追い出さないでーっ」

涙目になった年上の女の子を見て、着物の女の子はくすくすと笑い出した。笑いながら箆笥から紫の着物を取り出して女の子に渡す。

「ありがと」

むすつとした顔のままそれを受け取って、着替え始める。その横で衣擦れの音を聞きながらうとうとし始めた着物の女の子の頭から突然ぴよこんと耳が飛び出した。続いて尻尾もふさふさと出てきた。

「おーい、きつねちゃーん。耳と尻尾が出ましたよー」

女の子ははつとして耳と尾を仕舞う。その顔が見る間に赤くなった。

「まだ油断すると駄目だねえ」

「う……うるさい！まだ修行中なんだからしょうがないでしょっ」

ムキになる狐耳の女の子に更に畳み掛ける。

「今日は折角大人っぽい子目指してたのにねー」

「べ、別にいいじゃん！もうお寺の中なんだしっ」

「頑張ったのが台無しだねえ」

「頑張つてなんかいませんーっ！狐だからって馬鹿にするなー！」
「ごめんごめん」

火の赤っぱいぼんやりとした光に包まれた小屋の中、二人のやり取りが微笑ましい。真夜中に忘れ去られた寺から笑い声が聞こえたら不審がられるだろうが、幸い此処は田舎で、誰も起きてなんかいない。

暫くしてやっと二人が落ち着くと、狐耳の子はぼつりと寂しげに呟いた。

「どうしてあたしを頼ろうとしないの……？いつもいつも我慢ばつかして」

ぱちぱちと火花を散らす囲炉裏に半ば掻き消されたその言葉は、それでも向かいにいる女の子に届いた。

「ん……ごめん。なんかやつぱり悪いような気がして」

「全然悪くなんかないよ」

「うん」

「だってあたしは」

「分かってるって」

このおんぼろ寺が今もこうして残ってるのも、私がここまで大きくなれたのも全部あなたのおかげだってちゃんと分かってるよ。女の子は喉まで出かかった言葉をその先に出せずに曖昧に笑った。

「寝よ？あんずちゃん」

「あたしあんずじゃないよ、那奈」

「だって、狐に名前、ないんでしょ？」

「ん、まあね」

「今日はあんずでいいじゃん」

「明日もあんずでいいよ」

「これからもずっとあんずだね」

「うん」

たった今あんずと命名された狐は囲炉裏の火を消して、いつの間に敷いてあった布団に潜り込んだ。那奈と呼ばれた女の子もその布団

に潜り込む。

「どうして今まで名前付けなかったんだろうね」

那奈は真っ暗になった小屋を見渡しながら誰に尋ねるでもなく言った。

「さあ？」

あんずは答えながら小さく欠伸をした。つられて那奈も大欠伸。

「おやすみ、あんずちゃん」

「おやすみ、那奈」

二人の寝息とたまに葉から落ちる水滴の音以外、何も音がなくなつて、街は夜明けまで息を潜める。

*

*

*

「ん……」

隣から聞こえる食器の笑い合う音で那奈はうつすら眼を開けた。外はまだ薄暗く、空気は冷えきっている夜明け前。むっくり起き上がり隣に目をやると、あんずが朝御飯の支度をしている。

「あ、おはよう」

那奈の視線に気付いたあんずが彼女に柔らかに微笑みかけた。

「おはよ」

割烹着を着たあんずが小屋の内外を行ったり来たりしている間、那奈はぼんやりした頭であんずのことを考えていた。

狐にご飯作ってもらうなんて考えてみるとなかなか面白い光景だなあ。あんずちゃんが人間だったらよかったのに。そしたらもつともつとお喋りしたり出来るのになあ……。

コト。

不意に、静かに目の前にお盆が置かれた。紅いお椀に入ったお味噌汁と真っ白なご飯から白い湯気が立ち上っている。おかずは煮物と沢庵だけというシンプルな朝食だが、一見するだけであんずの真心が伝わってくる。美味しそうな匂いに鼻を擽られて那奈が箸に手を

伸ばすと、全て見透かしたような平坦な声をあんずが喉から絞り出した。

「あたしは人間にはなれないし、なる気もないよ」

沢庵を口に入れながら那奈が答える。

「ふん。わはってふよ」

もぐもぐごつくん。黄色い塊を超特急で胃に押し流して言い直す。

「うん。分かってるよ」

ここで一旦間を置いて「あんずちゃんは昔っから私の心が読めるよね」とちよつと拗ねたように付け足した。

「あたしが狐じゃ嫌？」

黙々と箸を進めながらあんずが悲しそうに聞いた。おかっぱ頭の下から上目遣いの大きな瞳が覗いている。

「ううん、そんなことないよ！」

慌てて手と首を横に振る那奈に、あんずはため息を吐いた。

「あたしもいつかはいなくなっちゃうから。そのことは忘れないでね」

なんとなく気まずい空気が小屋に立ち込めて、だんだん日が昇って辺りが明るくなってきて、昨日の雨なんて忘れたみたいに子供のはしゃぐ声が聞こえてきた頃。もうすっかり乾いたシャツに着替えた那奈が立ち上がった。

「じゃあ私、今日はもう帰るね」

「うん。もう一人で我慢したりしないであたしに頼ってね」

「分かってるって」

そう言いながら絶対頼ってくれないんだから、と口を尖らすあんずと、それでも私自立しなきゃ、なんて痩せ我慢をする那奈が、今日は珍しく背中合わせでお別れした。

*

*

*

まだ水溜まりの残る道路を重い足取りで歩く。鳥は歌い子供は遊んでいるのに、どうしてだろう彼女は俯き加減。

大好きなんだよ。大好きで大好きでほんとうしようもないくらいなの。だけど、甘えてばっかいられないじゃん。やっぱこのままじや駄目だっと思うんだよ。

最後の方は投げ槍になって、頭に浮かぶ言葉を片っ端から蹴りながら歩いた。折角雨粒でドレスアップした木々にも、鳥の大合唱のステージになっている電線にも彼女は目もくれない。途中で昨日の公園を通り過ぎた時だけちらりと顔を上げたけれど、それ以外は一回も。

やがて『桜食堂』と書かれた看板の前に行き着くと、引き戸をけたたましい音と共に開けて中に入っていた。そこは那奈の家みたいなもので、那奈が一人で切り盛りしている。開店してから早六年、未だお客無しという、逆の意味で街で評判の食堂だ。

元々この田舎では外で食べるという習慣がなく、わざわざここに足を運ぶ人などいないのだ。来る者といえば、ただ食いの狸やら鼬やら、そんな者ばかり。そろそろ店仕舞いしようと思いつつ、一人くらいお客さんが来てから……とずるずるここまで来ているという次第だ。

白い壁にぼっかり空いた丸い窓からふわふわと入り込んでくる気ままな光。それに照らされてどこか懐かしく佇んでいるテーブルと丸椅子に、那奈はどさりと倒れ込んだ。

「今日は誰が来るかなー……」

分かつてはいても呟かずにはいられない、寂しい響きが緩やかに消えていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4944ba/>

君に桜餅をあげる

2012年1月14日18時45分発行